

二年ぶりに来た手紙

この五十三年六月の手紙を頂いてから、特に連絡をし合うということはやめました。ここまで力をつけ、自信に満ちた毎日を送れるようになった愛子ちゃんに、いちいち指示する必要がなくなったからです。御両親の熱意と、愛子ちゃんのがんばりを、陰ながら応援しようと思っていました。

ところが、この本の原稿を書き終えたころ、二年ぶりで愛子ちゃんのお父さんから、お手紙を頂きました。それによると、愛子ちゃんの現状は決してよいものではありませんが、じっくり障害と闘う姿勢がうかがわれました。またそれには、愛子ちゃんの手紙も同封されていました。しっかりと大きな字で書かれた手紙を読んで、感激しました。脳障害にめげず、ここまで読み書きできるようになった愛子ちゃんに、心から拍手を贈ります。

お父さんの手紙

『五月一日、今日は、愛子が車にはねられ、頭蓋骨骨折の事故に遭い、意識不明で入院した日です。月日の過ぎるのは早いもので、愛子も十一歳、六年生になりました。

一年生、二、三、四年生までは、投薬で後遺症の癲癇発作はコントロールされていたのですが、四年生の冬休み頃から徐々に悪化し始め、投薬でコントロールできなくなりました。一日に数回、多い日には十回以上も発作が起きて倒れるようになり、病院を方々回って歩いた

のですが、良ならず、今年の一月から国立療養所、静岡東病院(癲癇センター)に入院、治療を受けております。

現在は、学習等、他の事は一切考えず、治療に専念しております。早く発作がコントロールされて、元気になることを毎日祈って過ごしています。

愛子の手紙、同封いたしました。元気になったら、またお力添えを宜しくお願いします。取り急ぎ近況をお知らせまで。

昭和五十五年五月一日

愛子父 〇〇

石井先生』

愛子ちゃんの手紙

『石井先生、わたしは十一さい、六年生になりました。ようちえんの時、かん字のゲームを、先生におしえてもらったので、本を、よんだり、字を、書いたり、できるように、なると、お父さんに聞きました。先生、ありがとうございます。

わたしは、今、しずおかのびょういんに、お母さんといいます。びょういんのまどから、ふじ山が見えます。

早くびょう気がなおってお父さんや、お兄さんのいるおうちに、かえりたいなあ。東京もいきたいです。さようなら。

五月二日

愛子』